ISSN-1880-4799　信州短期大学紀要，第 18 巻，76-82(2007.2)



# 軽井沢の文学空間と生活空間

根本　智治（信州短期大学）

Karuizawa: The literary topos and the living space

Tomoharu Nemoto (Shinshu Junior College)

本稿は「水声通信」二〇〇六年七月号（水声社）の特集「軽井沢という記号」に寄稿したものである。今回、篠原昭学長の推輓により、信州短期大学紀要の「地域評論」に転載されることとなった。転載を快く了承していただいた水声社の鈴木宏社長に厚くお礼申し上げる。尚、原題は「軽井沢文学空間」であり、雑誌掲載時には随筆的要素の強い「生活空間」の項目は編集部の求めもあり削除したが、この「地域評論」には「生活空間」の項目を載せることも一興かと思い、復活させることとした。したがって、題を「軽井沢の文学空間と生活空間」と改めた。またわかりやすさを考えて各項目に小見出しを付けることとした。

*

普通の人が知らないディープな軽井沢を項目風に、とのご注文である。筆者は十年前から近隣の佐久市（軽井沢から車で三十分）に在住し、年数回は軽井沢に出かける。軽井沢に居住する知合いも何人かいる。その意味で、「ディープな軽井沢」というよりも、言わば軽井沢の裏の顔というか、東京人の夢を剥ぎ取る軽井沢のいくつかの要素を知らないわけではない。

だが、これが読者の期待に沿うものであるのかどうかは甚だ疑わしい。おそらくこの問いそのものは軽井沢への夢を助長するようなものが期待として含まれているのではないか。佐久市に住み始めた頃、しばしば軽井沢に出かけた。これは 現在の冷たい視線で眺めれば、ただのミーハー気分と言うものだろう。職場の同僚に軽井沢の話を向けてみたりもした。だが、そのときの白けたような空気が印象的だった。地元の人々にとって軽井沢はほとんど魅力のないものであった。

軽井沢の歴史に無知であるとか、ただのやっかみであるとか言うことはたやすい。ただ、この「白けたような空気」はその後生活のいくつかの場面で、と言うことは床屋であったり、不動産の更新時であったりするわけだが、似たような経験をすることにもなった。生活する人々の実感というものは無視しがたいところがある。

軽井沢を愛する人々は夏の三ヶ月間、地獄のような東京の酷暑を離れて退避してきた避難民であり、その冷涼な気候の中で文学や芸術の創作活動にいそしむ。新幹線が開通していない頃、信越線で一駅一駅軽井沢に近づく度に空気が変わってきたという。言わば一夏の文学空間として軽井沢はあり、四季を通して居住する人々の生活空間との齟齬が生ずるのも当然のことであろう。

既に長野県人として十年の歳月を送る私としては、軽井沢在住者や近隣の土地に住む人達の本音をまったく無視するわけにもいかず、さりとて歴史的に堆積された文学空間としての軽井沢をも想像したい気持がある。おそらく以下の記述は軽井沢の正負両面、夢と現実との双方を混交させた中途半端な指摘になることをお断りしておく。

お題をいただいて、早速勤務先の短大の学生にアンケートを行った。北信・中信・南信・県外の学生も含むが、多くは東信地域の学生である。彼らは二三十年後には地域世論の中核となるわけであるから、その素朴な印象は軽視できない。以下順不同に掲げる。○軽井沢高校に通っていた。夏に天皇をお見かけした。登下校時によく猿と出くわした。○ミカドコーヒーのモカソフトがうまい。○軽井沢のお薦めは美術館（トリックアート）。○蓼科高校ジャズクラブ（映画「スウィングガールズ」のモデル）にいたが、大賀

一

ホールで演奏した。○クリスマスのイルミネーションがきれい。○鬼押出し園なら何度も行っている。○おしゃれで高級なイメージ。○高一のときに遠足で出かけた。○某ホテルでバイトした。売店はセレブの服しかない。○心霊スポットの軽井沢大橋はやばいから地元の人間は誰も行かない。○旧軽にはジョン・レノンが愛したフランスパンの店がある。○御代田町に住んでいる。軽井沢はもう飽きた。○御代田に住んでいるが、夜十一時過ぎに軽井沢に来ると何もすることがない。夏有名人が来るので少しお得。○熊がゴミをあさりに来る。○冬はとにかく寒い。○神聖な場所というイメージ。○就職活動のためのスーツを買った。○スポーツ用品のアウトレットは安い。○夏は涼しくていいが、車では行きたくない。○夏は軽井沢も暑い。○都会に住むセレブの方達が別荘を持ち、長野県の田舎にある高級な街というイメージ。○スタバ(スターバックスコーヒー)がある。○別荘たくさん。避暑地。お店たくさん。○変わったアクセサリーを買える。○某ホテルはイジメが激しく、持って三ケ月。○駐車場は高級車ばかりで私の車では停められない。○軽井沢でデートすると別れる。○佐久よりも田舎で物価が高い。○行っただけで少し高貴な気分になる時がある。

学生にとって軽井沢は生活空間そのものであり、買物や割のいいバイトの場所である。過去の歴史の記憶の堆積、たとえば有島武郎・芥川龍之介・室生犀星・堀辰雄・立原道造・川端康成・加藤道夫・風巻景次郎・中村真一郎・加藤周一・福永武彦・朝吹登水子・江藤淳・谷川俊太郎・加賀乙彦・後藤明生・森瑤子といった諸人物、つまりは文学空間を織り成した軽井沢という要素を彼らはたぶん知らないだろうと思う。何となくおしゃれで高級といったイメージを持つ学生がいる一方で、かなり冷めた印象を持つ学生がいることも事実である。

さて、テーマはディープな軽井沢であった。そのテーマに必ずしもふさわしくないかもしれないが、以下文学空間としての軽井沢と生活空間としてのそれとを織り交ぜながら項目風に記すことにする。私的備忘録のつもりである。

*

**在原業平と浅間山**

**在原業平**は九世紀(八二五―八八〇)の人。軽井沢を問題にしようとすればまずはこの人だろう。『**伊勢物語**』八段には「信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ」の歌が載る。『伊勢物語』の主人公「昔男」は後の二条后藤原高子との悲恋と政治的圧力に耐え切れなくなったかのごとき章段接続の印象を読者に残しながら、東国への旅に出る。業平の行程は京→伊勢・尾張→信濃の国浅間→三河の国八橋→駿河の国宇津の山→富士の山→隅田川というものであるが、後半はともかく前半の「伊勢・尾張→信濃の国浅間」の移動は現在の地理感覚からして異常である。南北の大きな移動は主人公の都への未練と執着と迷いとを象徴的に表わすものではないか。これが史実とも解釈されたのは国家事業としての『古今集』に重複する業平の歌があるからであろう。しかし、基になった業平の歌そのものがかなり虚構性に富むものだというのが現在の大よその理解である。『伊勢物語』の主人公は確かに軽井沢に来て「浅間」の歌を詠んでいる。しかし、業平はおそらく来ていない。

*

**浅間山は忍ぶ恋の歌枕**

**浅間山**は常時噴煙を上げているという情報が、少なくとも十世紀初頭の『古今集』時代においては広く知られていた。『万葉集』時代において、たとえば富士山は神の宿る巨峰として讃嘆されていた。しかし、その富士山も平安時代においてはかなわぬ恋を表わす恋愛歌語となる。浅間山もまたその多くは恋歌として用いられる。平安時代の恋は忍ぶものとされ、そこに美を見出していた。「夏虫」(螢)も恋の炎を体に宿していると理解した。浅間山も恋の炎を宿し、その煙は堪え切れなくなってあふれ出たものと解釈していたのである。平安時代の浅間山の歌を見る限り、現地に赴き、実見に基づく歌は一首もない。都人である平安歌人たちは浅間山を擬人化して疑わず、ひたすら恋愛歌語としての言葉の修練に心血を注いだのである。浅間山はひたすら観念的に造型されたのであり、その意味で虚構の空間である。実見に基づく歌は中世まで待たねばならない。

*

**浮川竹の勤めの身でも―飯盛女**

徳川幕府によって宿駅制度が成立すると共に、そこには飯盛女の存在もあった。『万葉集』の遊行女婦から語る必要もあるまい。遊女の歴史は日本文化の負の歴史として重

く位置する。飯盛女は吉原の花魁のような花のある芸事には長けていない。険阻な難所の碓井峠を乗り越えた足休めの場、浅間三宿（軽井沢・沓掛・追分）から分去れ（北国街道と中山道の分岐点）の間にたとえば彼女らはいた。多くは年貢が払えず、雪国の寒村とりわけ越後の国（新潟県）から身売りされた二十歳前後の女達であった。客を取らなければ雇い主にひどい折檻を受けるから、お茶を引かぬように店先で客引きをし媚態を浮かべた。何の因果か苦界に沈み、肉体を酷使することによって廃人同然、多くは早死にした。浮川竹の勤めの身でも元は泥臭い田舎娘。偶然の馴染み客に惚れこみ、逃亡・駆け落ちということもあったらしい。最高の形は客から身請けされることであったろう。しかし、こうした形がどれほどあったか。生臭い僧らの乱暴狼藉や、逆に金を毟り取られた客の話など、**五十嵐富夫『飯盛女』**や**岩井傳重『軽井澤三宿と食売女』**が伝えている。

*

**天明の大噴火と物語の発生**

天明三年（一七八三）の浅間山の大噴火は鎌原火砕流及び吾妻川の土石流による人的被害、そして火山灰や軽石の降下による農作物の被害が中心である。流死者は一六二四人に及んだ。**大石慎三郎『天明三年浅間大噴火』**には発掘調査によって二百年後に人骨が発見された生々しい描写を伝える。**渡辺尚志『浅間山大噴火』**では被害を人々がどう受けとめたか、村の責任者がどのように復興作業に取り組んだのかに関して詳細を知ることができる。後者によると、当時を知らせる多くの文献にこの災害を蛇・鬼・竜のしわざであると記す文献が大量にあることが注目される。この異常な災害に対して悪魔の跳梁を認めているのである。これを前近代的な思考法と捉えるのはたやすい。精神分析学的な説明も可能だろう。ただ、この浅間山が修験道の霊山であり、宗教的な基盤を持つことを忘れるべきではない。本来、そのような場所で災害が起きることはあってはならない。人々はこの災害が悪魔のなせる業であり、その悪魔をなだめ浄化する物語を編み出すことによって、それが祝福の物語に転化することを深層意識の中で願っている、と私は解釈する。

*

**森雅之と有島武郎―漂泊と恋**

俳優森雅之の代表作に林芙美子原作、成瀬巳喜男監督の「浮雲」がある。農林省の技師富岡とタイピスト幸田ゆき子が仏領インドシナで出会う。引揚げて後、富岡は妻子持ちであり、ゆき子との関係を拒む。ゆき子は娼婦にもなるが、富岡は不思議と腐れ縁を絶つことができない。最期は屋久島で朽ちていくゆき子を富岡は看取る。この話は情の深さ、腐れ縁、死すべき運命という点で、森雅之の父**有島武郎**の晩年を思わせる。一九二三（大正一二）年有島武郎四五歳、妻とは七年前に死別していた。武郎は自ら多くの女性と同時に自由に愛し合うことのできる本性であることを告白している。そして愛のためには死をも厭わないことを主張している。逆に束縛を受ける結婚は否定していた。波多野秋子二九歳、林謙吉郎という実業家が新橋の芸妓、小万に生ませた私生児であり、英語塾を開いていた波多野春房と結婚した。「婦人公論」の記者となり、敏腕な美人記者として有名だった。秋子は一緒に死ぬことを武郎に求めていた。事情を知った夫春房は金銭を要求し、警察への同行を述べて脅迫した。武郎は金銭の支払いを断わり、警視庁にも行くと言った。武郎の潔さに尻込みしつつ尚も金銭に執着する春房は、武郎の兄弟を巻きこんでもということを示唆し話し合いはもつれた。そのとき既に武郎は死を決意していた。武郎と秋子は六月八日軽井沢に向かい、三笠山の別荘で縊死心中を遂げた。死体が発見されたのは一ヶ月後であった。

*

**ショーとディクソン**

アレキサンダー・クロフト・ショー（一八四六～一九〇二）はスコットランド系カナダ人、福沢諭吉の私傭外国人、月給二五円。ジェームズ・メイン・ディクソン（一八五六～一九三三）はスコットランド人、東京文科大学（最初は工部大学校）の官傭外国人で月給は宿料を含め三九〇円。軽井沢発見当時、ショーは四十歳、ディクソンは三十歳であった。この方面の事情に関しては古くは大正元年発行の佐藤孝一『かるゐさは』、最近では宮原安春『軽井沢物語』（一九九一）に詳しい。とりわけ宮原の書は信濃毎日新聞のマイクロフィルムや宣教師の母国への報告「ミッショナリー・アウトルック」の調査に基づく詳細な分析がなされており、価値が高い。ショーとディクソンの二人の旅行によって軽井沢が発見され、東京の酷暑の堪え難さを避ける「避暑」の地として、多くの外国人に喧伝された

ことは間違いないようである。当時、外国人の土地の所有は認められておらず、日本人の知合いから九九〇年の借地権で別荘を手に入れていた事情、イギリス国教会の福音伝道協会からの布教活動費としてそれなりの財源を持っていたこと等が判明している。

*

**「高原」文学の発明**

加藤周一の信濃追分の交遊録を綴った書に『高原好日』がある。この「高原」なる語はたとえば**島崎藤村**『**破戒**』に「北佐久の高原に散布する新平民の種族」とある。また『**千曲川のスケッチ**』にはおおよそ十箇所前後で「高原」の語が用いられる。細かく見ていくと、東信地域のそこかしこを高原と呼んでいるが、突き詰めると浅間山麓の一帯を高原と呼んでいることがわかる。さて、私は「高原」なる語に違和感を持つ。日本に高原はあっただろうか。日本はこれを「山」と呼んでいた。山は天皇が権力支配を確認する場所(『万葉集』の「国見」)であり、古代中世を通して仏道修業のために籠る場所であった。中国においても多くは明るい修業の場所(『白氏文集』)であり、人の死を悼む場所(『文選』)であった。「山」は点であり、「高原」は面としての広がり・動態を持つ。確かに藤村の文学には「高原」の語が目立つ。宣教師・英語教師がプラトウ(plateau)の語を使用していなかったかどうかが気になっているが、もし藤村が発明もしくは普及させた語であるとすれば、藤村は明らかに西洋文学を下敷きにしている。『スケッチ』『奥書』にバルザック・トルストイ・ドストエフスキー・イプセン・フロオベルをよく読んでいたと書かれているが、藤村の高原は眼前の風景ではなく、見立てられた西欧であった。こうした「見立て」の論理に基づく虚の空間としての「高原」は、山崎の地に遠く中国の河陽を見立てる平安漢詩人のごとく、極めて伝統的な日本文学の手法であり、憧れの所産であった。

*

**立原道造と十五通の手紙**

府立三中(現両国高校)→一高→東大の道を辿った文学者に**芥川龍之介**・**堀辰雄**・**立原道造**がいる。彼らは下町の本所・向島・日本橋で育ったが、それぞれ軽井沢と深い奇縁を持ち、繊弱敏感な神経ゆえか短命を余儀なくされた。とりわけ道造は二四歳の若さである。石本建築事務所で道造二三歳、水戸部アサイは一九歳であった。病気休職中の立原は頻繁に軽井沢に出かけ、アサイを伴った。続く盛岡旅行さらには長崎旅行は単独で出かけ、恋人アサイに宛てた一五通の手紙が残っている。これを評伝風に愛情深く記した書物が**小川和佑**『**立原道造―忘れがたみ**』である。若い二人の写真を見る限り、幸福な未来が約束されているようにしか見えない。肺結核で命の灯が消えて行く中での道造とアサイとの関係、あるいは南北への大きな旅の目的はよくわからない面もある。道造は療養目的はもちろんだが、旅の中で自分を孤独に追い込むことによって詩から小説への階梯を昇る野心を持っていた。アサイとは深い心のつながりを求める気持ちもあり、甘えているような態度も見られるが、また一方必ずしも頻繁に逢おうとはしていない。最後の福岡からの手紙を見る限り、道造は旺盛な創作への意欲を吐露している。長崎に到着した途端、急速に病状は悪化し、それから三ケ月後に道造は逝く。道造は死の間際まで小説の完成とその後のアサイとの結婚を夢見ていたように思われる。アサイはプラトニックな愛を貫き、最期まで看取った。そして、長崎に住み基督者になった。

*

**大日向村の満州開拓移民**

**和田伝**(つたう)は農民文学の旗手であり、代表作の一つに『**大日向村**』がある。現在の佐久穂町の小海線海瀬の駅から茂来山の方向、抜井川に沿って狭小な山道を登ると大日向村がある。和田の作品は昭和一五年に前進座によって映画化され、大きく伝えられた。この作品は大日向村の満州への分村移民をテーマにしたもので、現在の視点から見れば、国策文学ということになるだろう。畠山次郎『大日向村―その歴史と民俗―』には昭和十年代の村の疲弊、その唯一の活路としての満州移民の経緯が記され、和田作品の楽天的な結末への批判も展開される。入植先は吉林省舒蘭県四家房の満州大日向郷。満人が既に開拓した場所を立ち退かせ、移民が地主、満人が小作人となった。当地で作った小学校の体操の風景なども写真に残っている。敗戦により多くの被害者を出し、苦難の末に辿り付いた先は軽井沢大日向地区。火山灰が埋め尽くす荒涼たる大地をまた一から開拓せねばならなかったのである。

*

**風巻景次郎のこと**

**風巻景次郎**は中村真一郎の王朝文学研究の師である。自ら歌人でもある風巻は創作と研究との緊張関係を維持しながら、しかしあくまでも科学的解明を怠らずに中世和歌や日本文学史の研究に生涯を捧げた国文学の巨人である。ただし、その生涯は苦難に満ちており、戦争をはさんで流浪の人生を送った人であった。最初の赴任先大阪府女子専門学校の教え子大松春子と結婚し、追放処分となる。失意のもとに長野県女子専門学校に行き、病気等の理由により、東京で浪人生活。東京音楽学校・清水高等商船学校を経て、北京輔仁大学で終戦を迎える。戦後二十三時間の非常勤講師の掛け持ちなど驚異的な努力のはてに北海道帝国大学に赴任する。当時まだ北大はあらゆるものが整備されておらず、種々雑用が風巻にのしかかり、心身は疲弊した。五六歳のとき故郷の関西に戻ったが、二年後に死亡した。全集十巻『**戦後日記・書簡**』はぜひとも国文学以外の人にもお勧めしたい書物。昭和二一年、沓掛(中軽井沢)昭森社社長の別邸で西行の評伝を書き上げるところから始まるが、風巻がどれだけ国文学に愛情を注ぎ、どれほど多くの事柄を誠実に思考していたのかがよくわかる。

＊

**江藤淳と千ケ滝**

江藤淳は慶応大学在学中に安藤元雄の紹介で借りた信濃追分の農家で『**夏目漱石論**』(山川方夫によって「三田文学」に掲載)を執筆した。幼い頃、虚弱で集団生活になじめず、小学校を逃げ出しては納戸に籠り、文学書を通して夢の空間を紡いで自身を慰めた。長じて堀辰雄の文学にも親近感を覚えるが、こうした世界に馴染んでは肺結核は治らないと思い忌避した。千ケ滝に別荘を構えた理由は「場所と私」(『文学集成5』)に詳しい。千ケ滝は追分よりも軽井沢に近く、堀辰雄を中心とする旧軽井沢からは一駅分の遠さがある。江藤は「非在」の空間である千ケ滝の別荘で少年時代の帝銀社宅にあった躑躅を植え、喪失した世界を取り込めた。堀辰雄を厳しく批判したが(『**昭和の文人**』等)、共感の視線も込められているのではないかと思う。晩年ともに『**幼年時代**』を出したのは運命の皮肉な一致としか言いようがない。江藤は生母を失い、生家を失い、戦後の価値観によって軍人の祖先を持つ家を失った。喪失を自らの宿命と観じ、その回復に努めた。そのことによって時代と融和する現在を失い、子供のいない家庭で妻を失い、最後は自らの手で自分を喪失させた。

＊

**北軽井沢の学者村**

群馬県浅間六里ケ原の法政大学村(今は大学村)に関しては**岸田衿子・岸田今日子**『ふたりの山小屋だより』に詳しい。野上豊一郎・弥生子、谷川徹三・俊太郎、岸田国士・衿子・今日子、田辺元、三島由紀夫、大江健三郎といった哲学者・文学者が登場する。谷川俊太郎によれば、旧軽を中心とする別荘族を「下の軽井沢」と呼び、あえて区別して清貧を尊ぶところがあったという(『かるいさわいろ』)。『山小屋』には岸田衿子による草軽電鉄(昭和三十年代に廃線)の描写があり、面白い。この電車はのろのろ走ることと、機関車の形から「カブトムシ」と呼ばれていたらしい。車であれば三〇分くらいのところを二時間で走っていた。「この世でいちばんのろい」と言われる所以は、「帽子を窓からとばされた人が、とび降りて帽子を拾ってまた乗ってもまにあったり、「ときどき降りて花を摘んで乗る人もいた」ということからわかる。貧乏学者村とか字引村とも呼ばれたらしいが、旧軽井沢を中心とする世界とは相当異なる質素な場所があったということになる。

＊

**軽井沢の寒さ**

軽井沢は住む場所ではないとは地元でよく聞く話である。軽井沢は商売の町であって生活する町ではないとも言う。これらは生活的側面を指していると思われるが、もっと端的な住みづらい条件として冬の寒さがある。俗に「冬ごし」と言うが、軽井沢の冬はマイナス二〇度である。生半可な寒さではない。道路は凍結し、雪が積もり、車での移動は時に困難を生ずる。凍結と言えば筆者は赴任早々タクシーに乗っていたとき、急に車が一八〇度回転してしまったことがあった。恐ろしくも愉快な経験である。それはともかく冬の軽井沢は雪で閉じ込められるといった印象もあるだろう。灯油ストーブの人はうっかり給油を忘れると冗談でなく凍死の可能性も出てくる。佐久もそこそこ寒いが、朝起きたとき、部屋の寒暖計が零度を指していたときには感動した。雪掻きは最初は面白い。だが、毎日やらされると腰を痛める。そして、段々雪が恨めしくなってく

る。それでも、樹氷等の独特の魅力も放っており、冬の軽井沢を好きな人が本当の軽井沢好きと言えそうである。

＊

**軽井沢の霧と黴**

軽井沢の霧のひどさを東京の人はよく実感できないと思う。碓氷峠のトンネルを通過していたとき、視界が五メートルもなく、前の車のかすかな光と中央の白線のみを頼りに通過したときは言いようもない恐怖を感じた。この霧は軽井沢に多くの湿度をもたらしている。水上勉はこの霧が心筋梗塞に悪いと家族に説得されて北御牧村(現東御市)に移住しているし、江藤淳は肺結核に悪いと旧軽を避けた。実はこの霧は軽井沢の家屋に黴として多くの被害をもたらしている。畳からキノコが生えてきたという話も聞いたことがあるし、森瑤子も旧宅は黴がひどかったと言っている(『かるいさわいろ』)。知合いの家では床下を一メートル高くして通風をよくし、全室の換気扇を回しっぱなしにしていると聞いた。

＊

**軽井沢値段**

地元の人間が大いに白けるのが軽井沢値段である。軽井沢値段とは東京値段のことであり、地元の物価と甚だしく相違する値段のことである。たとえば、喫茶店に入るとコーヒーやジュースが七百円だったり八百円だったりする。周辺の地元では三百円か四百円が常識である。つまり、二倍の値段を取られているわけである。だから、地元の人々は喫茶店に入らない。こうした治外法権的世界は夏の三ケ月で一年分を稼がなければ商売が成り立たないという軽井沢の特殊事情が存在するのであろうが、それを良しとする軽井沢観光者の是認の感覚があるのであろう。値段の高さが軽井沢の価値を高めているのである。夏になるとスーパーの肉・魚・ワイン・チーズ等の品揃えが一挙に高級品に変わる。かくて地元の人間はあほらしくなって軽井沢からますます遠のき、日帰り観光者はますます嬉しくなってくる軽井沢値段のからくりであった。

＊

**信州の暮らし向き**

信州の暮らしも十年。土着の人々から見れば短すぎ、夏季限定訪問者から見れば長すぎる時間である。信州での暮らしは一言で言えば、寂しい生活である。夕方仕事から戻り、コタツに入ったまま動くことはない。夜遊びはしない。と言うよりも、する気が起きない。人間関係は希薄である。東京では狭い空間に大量の人々がひしめき、いがみ合っている。だから、胃が痛くなる。信州では人間が閑散としている。無論こうしたことは個人差があるだろうが、似たり寄ったりだとの話も聞く。コタツに入って何をするか。ひたすらテレビを見るのである。テレビを見るのも時々飽きるから、考え事をする。他人との接触がないから、流行の思想には鈍感になる。ポストコロニアルと言われても何のことだかわからない。ただその分、一つのことをずっと深く考えようとする姿勢ができる。たとえば、生と死というような根本問題に関心が向く。しかし、これを遣りすぎると鬱病になる。鬱病にならないためには宗教的態度が必要になる。つまり神や仏と対話するのである。信州での暮らし向きはそのように過ぎて行く。

＊

**サンドイッチ屋のこと**

軽井沢に年数回行くなどと思わせぶりなことを書いた。だが正確に言えば、そのほとんどはお気に入りのサンドイッチ屋に出かけているのである。六本辻を少し過ぎたところにある。そこのご主人は五月から十一月まで七ケ月ここで商売する。そのあと東京に戻る。サンドイッチのセットは千五百円を越え、決して安い値段ではない。ではなぜ行くのか。一つ一つのサンドイッチが高度に完成されていて十分な満足感を与えてくれるからだ。私はこの店に東京的なるもの、少々余るぐらいの東京を感ずる。信州に来て驚いたのは焼肉屋と看板にあり、ラーメンも食べられるかのごとき表示がある。中に入ってメニューを見ると、なんと和食もあり、洋食のメニューもあるではないか。良く言えば総合レストランである。くだんのサンドイッチ屋は専門に特化している点、深さを限りなく追及している点、つまりは職人としてのプライドを感じさせる点において、良質の東京を感じさせる。そして、東京でもサンドイッチ専門レストランがおそらくは成立しないだろうことを想像しても余り過ぎる東京を感じるのである。

＊

**玉村豊男と「死ぬ場所」**

玉村豊男をテレビで拝見する、笑顔の似合うコメンテーターとして記憶している人は多い。玉村が東京から軽井沢へ、さらに東部町（現東御市）へと移る土地探しの物語が『種まく人―ヴィラデスト物語―』である。その冒頭は「そろそろ死ぬ場所を探しはじめるのも悪くはないな」というショッキングな書き出しから始まる。それは大量の吐血と続く肝炎とがもたらした言葉であろう。その後の仰臥生活、さらに回復期に夢想した果樹の茂る斜面、それが数々の土地探しの物語となり、現住所への移転を決意させて行く。玉村は必ずしも軽井沢に嫌気がさして移住したわけではない。人生の締め括りを予感した中で、人と逢わず農夫としての仕事に精を出すのが極めて自然な感覚であったのであり、またそのことによって病身の体から体力を回復させ頑健な体を所有するに至らせるのである。ほとんど運命的としか言いようがない展開に見えるのは玉村のストーリーテラーとしての実力だけではあるまい。玉村も述べるように農園の管理は相当な苦労が伴うようであり、なまなかな人物では遣りおおせるものではなかっただろう。玉村のような人生がかりに稀有のものであるにせよ、東京の延長である軽井沢からさらに信州の奥へと移動し、より豊かな人生の自然を手に入れた人物がいることを我々は知ることになる。

*

あれこれ思うままに書いた。ゴミ処理の問題や総合病院建設への願望といった喫緊の課題もあるが、この稿の埒から外れるので省略した。軽井沢の定住民は一・八万人、夏の別荘族が訪れるとその十倍、日帰り観光者を含めると五十倍の一千万人弱の人間が軽井沢を訪れる。軽井沢は明治以来百年巨大なリゾートとして君臨し、それゆえの多様な問題も存在する。この稿で軽井沢の批判を書いたと思われると、筆者の意図とはそぐわない。文学空間としての軽井沢と生活空間としての軽井沢、つまりは軽井沢の夢と現実を描いてきたつもりである。軽井沢の不便や不都合をあらかじめ知っていれば、軽井沢に不満を述べることもあるまい。この稿は老後の隠棲地に軽井沢をと考えている人をどこかしら念頭に置いて書いてきた。旧軽を抜けて一歩奥に入れば、やはりそこは別天地である。東京のあらゆるノイズや世俗の煩雑な塵埃を拒絶した空間があることも確かである。とりわけ湿度の高いこの日本列島の中で、寝苦しい夏の夜長が存在しないこと一つを取っても、軽井沢を理想郷と称するに異論はあるまい。そして、多くの文人を育てた文学空間としての軽井沢は地元の人々の生活空間としての軽井沢と今も埋めがたい距離を残したまま、虚構の、夢の空間として存在し続けている。

（投稿二〇〇六年八月三日、受理二〇〇七年一月十一日）

〔付記〕
この稿をなすにあたって、千葉一幹氏（拓殖大学）・藤森大祐氏（東京富士大学）に種々お世話になった。記して謝意を申し上げる。